

老人の座位保持に関する現象学的考察
「生きられた世界」にかかわる看護を求めて

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

看護とは、対象となる人の生きる過程に寄り添い、その関係性の中で対象者の固有な世界の変化をとらえ、その人がその人らしく生きられるように援助することである。看護の対象が老人である場合、生きることの質を高めるような援助がなされなければ、たんに寝たきり老人の数を増加させることになるだけである。

寝たきり老人の援助の中で、座位保持への取り組みは、老人の生活の活性化につながり、効果的であることが先行研究において検証されている。その効果を評価するさいの評価指標を見てみると、・生理的機能（平均血圧、リーチテスト、筋肉量、握力）、・ADL（セルフケア）、・非臥床時間などがある。これらの量的側面も重要であるが、看護は人々の生きる過程に寄り添い、当事者がその人らしく生きられるように援助するものである以上、量的側面だけでは測りきれない、その人固有の現象にも目をむける必要がある。

そこで本研究では、寝たきり老人の座位保持を援助するプロセスの中で、老人が体験する世界の変化をとらえ、それに対して現象学的な考察をおこない、生きる過程に寄りそう援助者としてのあり方を明らかにした。研究では、ある老人保健施設に入所している寝たきり老人2名を研究対象とした。いずれも運動機能に障害があったが、リハビリテーションを必要とする時期にあったため、寝たきり起こしのプログラムを計画し、座位保持への援助を実施した。その過程で、老人が体験する世界の変化から明らかになったことは、以下のことであった。

（1）臥位から座位への変化は、生活世界を広げる。老人は、座位へと移行することで、その知覚空間を広げ、その知覚された状況から過去の体験を想起し、その想起された状況に身をおくことで自分自身のアイデンティティを保つことができた。

（2）臥位から座位への変化は、身体に根ざした知性に目覚める機会となり、自分が身体的存在であることを実感することとなる。

（3）臥位から座位への変化は、生きられる空間の意味を変化させる。

（4）臥位から座位への変化は、空間の広がりとともに知覚される時間体験のなかで、過去の生活体験を意味づけ、未来への志向性を生み出すものとなる。

看護において、人の生きる過程に寄り添い、その人がその人らしく生きられるように援助するとは、その人が生きてきた過程をとらえ、それを今を生きることに結びつけ、さらに未来を志向しながら、その存在意味を共有するということである。老人にとって、その体験世界を大きく変化させるのが、座位保持への援助なのである。